

第24回 これからの学術情報システム構築検討委員会 議事要旨

1. 日時：2019年6月24日（月）10：00～12：00

2. 場所：学術総合センター 20階 実習室1

3. 出席者：

（委員）

小山 憲司	中央大学 文学部 教授
相原 雪乃	北海道大学附属図書館 事務部長
佐藤 初美	東北大学附属図書館 情報管理課長
栗谷 禎子	公立はこだて未来大学情報ライブラリー
原 修	立教大学図書館 利用支援課 課長
飯野 勝則	佛教大学図書館 専門員
近藤 茂生	立命館大学図書館 学術情報部 次長
柴尾 晋	明治大学 学術・社会連携部図書館総務事務室副参事
福島 幸宏	東京大学大学院情報学環特任准教授（テレビ会議）
大向 一輝	国立情報学研究所 コンテンツ科学系 准教授
小野 亘	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課長
片岡 真	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 副課長

（欠席）

米澤 誠	京都大学附属図書館 事務部長
塩崎 亮	聖学院大学基礎総合教育部准教授

（陪席）

木下 聡	国立情報学研究所 学術基盤推進部 次長
------	---------------------

（事務局）

藤井 眞樹	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係長(CAT/ILL、CiNi/KAKEN 担当)
上野 友稔	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係長(CAT/ILL 担当)

<配布資料>

委員名簿

第23回これからの学術情報システム構築検討委員会 議事要旨

1-1-1. 2019年度これからの学術情報システム構築検討委員会活動計画

1-1-2. これからの学術情報システム構築検討委員会 2019年度以降の体制図

- 1-2-1. 2019年度システムモデル検討作業部会の活動について
- 1-2-2. 2019年度システムモデル検討作業部会 委員名簿
- 1-3-1. 2019年度システムワークフロー検討作業部会の活動について
- 1-3-2. 2019年度システムワークフロー検討作業部会 委員名簿
- 2. 大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）との連携体制について（報告）
- 3. 図書館総合展について（案）
- 4-1. CAT2020の現状及び今後のスケジュールについて（報告）
- 4-2. NII 学術情報基盤オープンフォーラム 2019 について（報告）
- 4-3. CAT2020 説明会等について（報告）

<参考資料>

- 1. これからの学術情報システム構築検討委員会規程
- 2. これからの学術情報システムの在り方について（2019）
- 3. これから委員会\_2019年度以降の体制図（叩き台）（第23回これから委員会 配付資料 6-2）
- 4. システムモデル検討作業部会内規
- 5. システムワークフロー検討作業部会内規
- 6. 連携体制強化による活動について（協力依頼）（2018年度第4回 JUSTICE 運営委員会資料）
- 7. これから委員会との連携体制について（2019年度第1回 JUSTICE 運営委員会資料）
- 8. JUSTICE 提案書情報のデータ共有に関する実証実験：公募要領（案）
- 9. 2018年度活動報告（電子リソースデータ共有作業部会）
- 10. 2018年度活動報告（NACSIS-CAT 検討作業部会）

4. 議事：

議事に先立ち、事務局より5月17日付のメール審議において、「これからの学術情報システム構築検討委員会規程」第5条に基づき、互選により委員長として小山委員を選出した旨の報告があった。

また、2019年度の委員について、事務局より「委員名簿」をもとに説明を行い、5月27日付のメール審議において、相原委員をシステムモデル検討作業部会主査に、飯野委員をシステムワークフロー検討作業部会主査に決定した旨の報告があった。

(1) 2019年度の活動体制について

事務局より、委員会の活動計画及び検討体制について、資料1-1-1、1-1-2、参考資料1～3に基づき説明があった。

続いて、相原システムモデル検討作業部会主査より、資料1-2-1、1-2-2、参考資料4について、続いて飯野システムワークフロー検討作業部会主査より、資料1-3-1、1-3-2、参考資料5について説明があった。審議の結果、各作業部会の活動について、意見交換の内容を踏まえ、各作業部会で2019年度の活動計画を検討し、次回の委員会において報告することとした。

質疑・意見交換は次のとおりである。

[作業部会の活動の展望について]

- 「在り方(2019)」に「2022年を目途とした」という記述もあり、2022年に更新されるシステムの詳細が見える形にしていく必要があると考えているが、そこに向けて各作業部会で検討を進めるという理解で良いか。
  - ▶ ご指摘のとおりの流れで各作業部会において活動していくことになると考えている。
  - ▶ 2022年という区切りは、NIIのシステム更新という事情が大きい。CAT2020は現在のNACSIS-CAT/ILLの機能改修を行うものであり、冊子体を中心としたシステムであることに変わりがない。委員会・部会の課題は、現行の機能を維持しつつ、「在り方(2019)」で示された方向性に沿って電子資料をどう扱うか、国際的な互換性をどう高めるかにある。それを実現するために、新たな機能を含めた環境を追加的かつ各機関が選択可能な形で実現することを目標として検討を進めたい。

[ローカルシステムの扱いについて]

- ローカルシステムの検討は各部会の課題の中に出てくるが、両作業部会の具体的な分担はどのようになるのか。
  - ▶ システムモデル検討作業部会では共同運用に関わる検討を行い、システムワークフロー検討作業部会では具体的な業務の流れを検討する。
- システムモデル検討作業部会では中央システムを中心に考え、運用の方法とローカルシステムを含めた共同調達の方法について検討したい。
  - ▶ 現在のNACSIS-CAT/ILLの機能を維持しながら、新たな機能を追加するにあたって、併せて参加館による運用体制やコスト負担のあり方についても検討する。また、中央システムの利用にあたって、大学がそれぞれローカルシステムを導入して活用する現行の方式だけでなく、共同調達・運用する方策も併せて検討したい。
- 現在の図書館の業務に関わるローカルシステムについては、システムワークフロー検討作業部会で具体的な内容を検討したい。
- 2022年に更新されるシステムで追加する機能等については、今年度中に仕様を検討することを想定している。
- システムワークフロー検討作業部会の課題の中では、2022年の更新で実装される部分と、2022年以降にさらにシステムを拡張して対応が必要となる点も含めて検討したい。

(3) 大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)との連携体制について

事務局より、資料2、参考資料6~8について報告及び説明があり、公募要領の内容・スケジュールはシステムワークフロー検討作業部会で検討し、JUSTICEとの調整を経て、委員会に諮った上で、JUSTICE事務局に正式に依頼することとした。

質疑・意見交換は次のとおりである。

[JUSTICE 参加館に対する部会への活動協力について]

- システムワークフロー検討作業部会への協力は、多くの大学に参加していただくことを想定しているのか。
  - JUSTICE 事務局とも調整していたが、ワークフローは各大学で利用しているツール等により複数考えられるなどの課題もある。今年度はワークフローを一緒に検討いただく参加機関にご協力をいただき、検討したワークフローを基に次年度以降は広く参加機関を募集してはどうか。
  - システムとの連携を考えると、API の利用などの技術的な要件を検討する必要があるため、対象は絞る形にしてはどうか。
  - 広く参加機関を公募するには、参加機関が作業するためのマニュアル等が揃っていることが前提で、参加機関が有効性を評価できる状態である必要がある。
  - 今年度は、システムの利用方法などの整理や、データの受け渡し方法などの検証が主となる

[提供されるデータについて]

- 2020 年向けの提案書情報を提供するとなっているが、1 月スタートの契約の情報は 1 月から使えるという理解で良いか。
  - 2020 年向けの提案書情報（タイトルリスト・ライセンス情報）を 1 月から利用できるように準備することを想定しているのが、ご理解のとおりである。加えて、2019 年度のデータも揃えて提供するほうが業務に即しているという意見もあるので、併せて準備することを考えている。ローカルシステムの中で、これらの情報を管理情報として蓄積しつつ、契約手続きに利用するために、いつ、どのような形式で提供する方法が良いか、ということが次の課題であると認識している。
- 2020 年以降も同様の検証を継続するということは前提となるのか。
  - 今回の検証結果により、検討する。
  - 年度途中からなどの参加も、柔軟に対応したい。

(4) 図書館総合展について

事務局より、資料 3 について説明があった。審議の結果、意見交換の内容を踏まえて、企画内容を検討し、準備を進めることとなった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

[「在り方 (2019)」を踏まえた各種ベンダーの描く未来像] について]

- 現在は、委員会の活動 20 分、ベンダー 50 分、質疑応答 20 分という時間配分を想定している。
- 中央システム、ローカルシステム、それぞれについて、「在り方 (2019)」に対してご意

見をいただいているベンダーを中心に登壇をお願いしたいと考えている。

[委員会の報告について]

- もし 2022 年のシステムのことを語るのではあれば、委員会としてある程度の方針が出ている必要がある。一方で、ベンダーからは具体的な提案が出てくると想定される。
- 委員会や、各作業部会の進捗状況をお知らせする形になるのではないか。
- 11 月時点で本委員会および各作業部会の検討がどの程度進むかは未確定である。したがって、「在り方（2019）」の説明を中心にしてはどうか。

[ブースについて]

- ブースでの CAT2020 に関する個別相談は参加館に有効であると思うので、ブースでの対応を手厚くし、参加館向けに特化する。

(5) CAT2020 について

事務局より、資料 4-1～4-3 について報告があった。

(6) その他

(ア) 片岡委員より、これから委員会の活動に関係する、NII における中央システムの検討状況について、報告及び説明があった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

- 2022 年に更新するシステムを検証している。
- ローカル図書館システムを変更しなくても利用できることを前提としている。
- 追加機能として、電子リソース情報を活用できる機能を参加館が選択できるかについて、調査を行っている。
- NII では、現行 NACSIS-CAT/ILL が提供している機能は、2022 年以降も継続して提供し続ける。
- 委員会では、実現すべき機能について引き続き議論を行っていく。

(イ) 事務局より、『大学図書館研究』の 2019 年 111 巻に、小山委員長・飯野委員・佐藤委員によるこれから委員会及び昨年度までの作業部会の活動報告の論文が掲載された旨の報告があった。

(ウ) 片岡委員より、2019 年 7 月 2 日（火）に開催される「大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議」において、小野委員よりこれから委員会の報告を行い、トピックレクチャーを福島委員にお願いしている旨の報告があった。

以上